

布施辰治—— 「人を想う」経営の原点



TOPPAN ホールディングス会長
経団連サイバーセキュリティ委員長 かねこ しんご 金子 眞吾

私がこの本を手にしてからもう半世紀以上の時が流れているが、思い返すたびに初めて読んだ時の興奮がはつきりとよみがえってくる。

進路について悩んでいた高校3年の夏休みに地元の書店でふと目にしたこの本を読んだことで、それまで全く考えていなかった「法律家を目指す」という目標がにわかになされたのだ。高3の夏休みに進路に悩んでいるとは随分のんびりしているが、母校である埼玉県立浦和高等学校では、当時は一浪して大学に入るのが当たり前という雰囲気だった。農林省の技官であった父のように自分も理系の道に進むのかなと思ったり、自らの意に反して銀行マンになった長兄からは自分と同じ轍を踏むなど言われたり、普通のサラリーマンにはなりたくないという程度の漠然とした将来像しか持っていない自分に対して少し焦る気持ちもあったかもしれない。

布施辰治は明治13年に東北の農村に生まれ、苦学の末弁護士となり、明治から昭和にかけて活躍した人物である。トルストイの思想に傾倒し、徹底的に弱者に寄り添う人権派の弁護士として、労働争議や朝鮮独立運動家の弁護に取り組んだ。懲戒処分により何度も弁護士の資格を剥奪され、治安維持法違反で入獄するなど、度重なる当局の圧力にも屈することなく、圧倒的な熱意で異色の活動を展開した。本書の著者は布施辰

治のご子息だが、感情を抑えた淡々とした筆致で、辰治の生涯が描かれており、それがかえってリアルに私の心に響いた。

私の高校生時代はちょうど学生運動華やかなりし頃である。そんな時代の雰囲気も影響して、体制に抗い物申す布施弁護士の生き様に私は惚れてしまい、その勢いのまま、当時司法試験合格者数が全国1位であった中央大学法学部に進学することとなった。

紆余曲折を経て、私は会社員として社会人生活をスタートすることになったが、折に触れ、布施辰治の人権保護への熱い思いが私の中にいまだ脈々と生き続けていることを感じる。私は経営者として最も大切にすべきは「人」であると思っている。今回、グループの経営体制を刷新するに当たり、新たに「人を想う感性」と心に響く技術で、多様な文化が息づく世界に。」というパーパスを制定した。社会に貢献する企業として、「人を想う」会社であることが何より大切との思いを込めた。その原点は、布施辰治の熱い想いにあると言っている。う。



ある弁護士の生涯—布施辰治—
著者：布施相治 岩波新書